

Stab, als ich aus meiner Mutter Hause ging. Der Stuhl aber ist meiner lieben Mutter Spinnstuhl gewesen, an welchem sie so viel gearbeitet hat, daß ich auf der Schule leben konnte.” – Als nun die Gäste alle beisammen waren, bat er dieselben, das er noch einen fehlenden Gast holen dürfe. Siehe, da kommt er schon zurück ; und an seinem Arme führt er ein gekrümmtes, altes Mütterchen in Bauertracht und setzt es auf den Spinnstuhl obenan.? Es war seine Mutter, die er also ehrte.

1. es sich sauer werden lassen, 辛苦スル。 – 2. in der Welt hinaufkommen, 立身スル。 – 3. gewahr werden, 視ル。

先へ進むにつれ次第に難度が高くなり、文も長くなっている。初級後期から中級程度ぐらいと云って良からうか。

歴史上の人物を扱ったものとしては「ヴィルヘルム一世王の勇猛」「野戦病院における皇帝ヴィルヘルム」「フリードリッヒ大王と街の悪童たち」「フリードリッヒ2世と小姓」など相当に多い。これは、明治初期・中期に独語教科書として用いられたヴェルテル万国史が、もはや30年頃にはもう用いられなくなったので、それを少しでも補う意味があったのではあるまいか。

だが、この龍南会読本はあまり用いられなかったようだ。初版だけで、重版は出なかったことでも分かる。五高記念館に明治30年代の「第五高等学校大学予科教科用書目」という、各年ごとの使用教科書を記した資料が保存されているが、それを見ると、ごく稀にしか使われていない。それでもこの読本が出版された直後、1898年（明治31）8月に五高から三高に転勤になった賀来熊次郎は、「第三高等学校独逸語細目」（明治33年4月15日発行『独逸語学雑誌』）によると、一年医科生に対して用いており、ほかに同僚で、旧知の大井和久（賀来と大井は共に以前、警官練習所の訳官を務めた）も一年法・文科生に対して用いた。だが、これはむしろ例外的であった。そういうわけで明治42年3月号『独逸語学雑誌』掲載の「各高等学校独逸語教科書」を見ても、龍南会読本を採用しているところは五高を含め一校もない。

龍南会読本が用いられることが少なかったのは、内容が時代に合わなくなっていたことが考えられる。もし明治10年代ないし20年代だったら、もっと用いられたであろう。この読本が出た明治30年代になると、五高生はより高度で、より文学的なもの、思想的なものを求めるようになっていたのである。

それでも語学教科書として見た場合、この読本を、辞書を用いて一編一ぺん丹念に訳して行けば、相当な読解力が養成されることは間違いない。

放浪の日本学者 A・グラマツキー

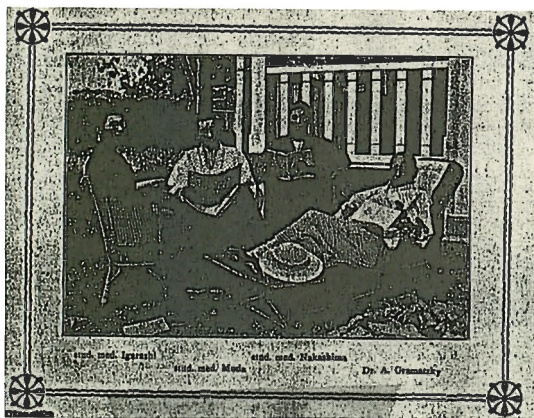
アウグスト・グラマツキー（August Gramatzky）といっても、今では彼のことを知る人は殆どいないのではあるまいか。彼は明治から大正にかけて山口や鹿児島的高等学校等で独語教

師を務めてた人で、元来日本学者である。来日前に既に古今和歌集の研究によって学位を得るなど実力のあった人だが、性格的に問題があったようで地位が安定せず、結局大成せずに終わった。

グラマツキーは1862年ベルリン生まれ。最初ベルリンのフリードリヒ実科ギムナジウム（古典語の代わりに数学・自然科学を重視する学校）に学び、次いでメクレンブルク州 Bütow の実科ギムナジウムを卒業した。その後ベルリン、イエーナ、パリ、ハレ各大学において、はじめ医学を修めたが、のち近代語を学んだ。この間1887年から90年までベルリン東洋語学校（1889/90はパリ東洋語学校）で東アジア諸言語を学び、1890年に日本語のディプロム試験に合格した。そして92年にはハレ大学から古今和歌集の研究でドクトル称号を授与された。これは古今和歌集巻の第六の遠鏡・冬の歌の草書と独訳に関する研究で、語彙と注釈が添えてある。翌年ライデンで出版された。論文に記されたラテン語の略歴によると、ベルリン東洋語学校ではランゲ教授と井上哲次郎に日本語を教わったことが分かる。中国文法は有名なガベレンツに指導を受けた。

彼は早くから渡日を願っていたが、それは直ぐには叶えられなかった。それで諸校で英語や仏語を教えたり、さらにはプロイセン貴族院で速記者として働きながらチャンスを待った。そして1898年（明治31）に至りそれが実現した。彼の「ベルリンから日本へ」（『Ost-Asien』No.11, 1899）という文章によると、当時東京帝国大学の独文学教授としてベルリン東洋語学校時代の学友（カール・フローレンツを指す）が活躍していたが、日本の地方の高等学校で3年働いてみる気はないか、と照会して来たので、グラマツキーは喜んで応じたのだという。こうして彼は山口高等学校に招聘されることになった。記録では彼が日本郵船の丹波丸でアントヴェルペンを発ったのは1898年7月14日であった。そして7週間で神戸に着いた。

さて、彼は明治31年9月21日付けで山口高等学校の独語教師に就任した。同僚に登張竹風（信一郎）がいた。登張は最初9月15日に門司港に彼を出迎えた時の印象を「ドイツ語懺悔」（『登張竹風遺稿追想集』所収）の中で次のように述べている。



グラマツキー（右端）

むにも恐れるにも当たらないのであるが、その刹那には、『これは、どうも、容易ならざる人物がやって来たわい』と思った。』

だが以後、グラマツキーと登張は公私にわたり親しく交際するようになった。グラマツキーに頼まれて、その姓に日本字を当てて、鞍馬月と名付けたのも登張であった。この頃書いたも

「船の着いたのは朝の九時であった。上甲板に烏打帽を冠った、無髯の赤ら顔の肥大漢が私の方へつかつかと歩み寄った。外に西洋人らしい人もゐないから、てっきりそれと推して、こちらも破顔一笑歩み寄った。握手をした。果してその人であった。生粋のベルリン張りのドイツ語で、洵に声は美しいが、蛇喰ふと聞けば恐ろし雉子の声で、刀痕満面、物凄いことであった。後に聞くと、それは、学生時代の決闘数十合の名残であって、言はゞ勇壮なドイツ魂の発揮なのだから、敢て怪し

のには「ドクトル鞍馬月」と署名されたものが見られる。グラマツキーは山口高等学校の最初のドイツ人教師で、そのために珍しがられ注目されることも多かった。加えて特異な言動により周囲の人々を驚かしたことも一再ではなかったようだ。お雪さんという、山口第一の洋風ホテルの娘とのロマンスも生まれた。登張は粹人として知られる独逸学者であるので、そうしたグラマツキーの生き方も理解できたであろうし、何より彼を「フィロロギーの碩学」として尊敬していた。

ここで山口時代に発表したものから論文と翻訳各一編について触れておきたい。

一つは『ドイツ東アジア自然・民族学協会報告』（第7巻1899）に寄稿した、山口市香山園にある毛利敬親の偉功をたたえた勅撰銅碑に関する研究である。冒頭でグラマツキーは、自分はたまたま最近、日本の歴史政治上最も興味ある山口に住むことになった。当地からは古来、とくに維新以来、重要な人物が輩出している。それですべての日本研究者、とりわけドイツの同学に、幕末の動乱期の藩主毛利敬親の偉功を碑文によって伝えたいと、述べている。内容的には、漢文の碑文全体を引用し、ローマ字で読み方を示し、それに独訳文を添えたものである。転写と翻訳では登張の助力があり、全体の校閲には毛利侯ゆかりの、ドイツ留学から帰国したばかりの上山小二郎が当たった、と付記されている。

もう一つは『Ost-Asien』（No. 5, 6, 1898）に二回にわたり載った「“Zazen” 坐禅 oder “Die versteckte Andacht”」と題する二幕の能狂言本の独訳である。これは前年のクリスマスにベルリンの「和独会」（グラマツキーはその熱心な会員だった）においてドイツ人二人と日本人一人によって上演されたものであった。いずれにしる珍しいもので、同じ頃山高の茶会の様子なども報告して、興味が広がっている。

だが、グラマツキーはまもなく山口を去ることになる。親友の登張が1899年（明治32）9月に東京の高等師範学校に転任したのに加え、酸も辛いも噛み分けた河内信朝校長も明治33年には辞めた。登張の後任の長江藤次郎とはなぜかそりが合わず、喧嘩が絶えなかったという。そういうこともあってか、彼は鹿児島の第七高等学校造士館に転任した。

鹿児島高等中学造士館を前身とする七高造士館は1901年（明治34）6月に文部省令を以て大学予科を設置し、9月から授業を開始した。この時二人の外国人教師が赴任している。一人がグラマツキーで、もう一人は以前一高で漱石に英語を教えたマードックである。年齢はマードックが6歳上だが、ともに日本学者であり何らかの交流があったと思われるが、詳しいことは分からない。

グラマツキーは「西郷と煙草と造士館で有名な鹿児島」と書き、山口では毛利敬親の頌徳碑を研究したのに対し、今度は七高造士館の歌（藤村作教授作歌）を独訳し、『T'oung Pao』誌（1902）に発表した（全25行）。

Satsumaland am Strande der Westsee!
Recken gebarst du: Okubo, Saigo,
Des Reiches Führer waren sie.
Himmelwärts strebend raget das Seethor,
Wasser, krystallrein, ziert die Brokatbucht,

Schau'n wir den Kaimon, baden im Meer wir
Auf unserm Schreibtisch türmen sich Bände,
Doch hehrem Ahnenbeispiel, dem
Lasst folgen uns, und vorwärts geh's,
Treu dem geliebten Herrn!
Satsumaland im äussersten Kiushu!.....

といったもので、注も付いている。また「鹿児島島のシェークスピア」（『Ost-Asien』No. 62, 1903）は、明治36年2月8日に当地の劇場で演じられた川上音二郎劇団のメンバーによるシェークスピア作オセロの翻案劇を観た時の印象を伝えた興味深いものだ。

久保田温郎が『七高思出集前編』の中で語っているのを要約すると「ドイツ語のグラマツキーはちっぽけな家に日本人らしい細君と住んでいた。当時東京で出ていたドイツ語の雑誌上でよく文法の議論をしていた。英語のマードックは純朴な人間で、無頓着な人だったが、グラマツキーも野蛮な男で、コートをはかに着て、シャツなんか着なかった。日露戦争の時に露探に間違えられ、長崎でつかまえられたと聞いた」。確かに東京で出ていた『独逸語学雑誌』に時折語学記事を寄稿していたが、それは独語教師としての立場からであって、専門は日本研究だ。露探に間違えられたことは彼の風貌や行動から或いはあったかも知れない。いずれにせよ七高は3年で辞め、1906年（明治39）一月初めにはベルリンに帰った（『Ost-Asien』No. 96, 1906）。

だが日本への思慕止みがたく、間もなく再来日し、大阪高等医学校次いで、陸軍大学の独語教師となった。そして『山口高等商業学校沿革史』によると1912年（大正元）12月16日付で山口高等商業学校教師を委嘱された（大正3・8・30契約満期）。だが山口大学所蔵の履歴書には次のように記されている。

- 一、千九百十三年ヨリ千九百十四年マテ郷里伯林ニ
滞在
- 一、千九百十五年ヨリ千九百十七年マテ日本ニ上陸
許可セラレサルニ因リ桑港ニ在リテ個人教授及
独逸総領事ノ翻訳ヲナス
- 一、千九百十七年ヨリ千九百二十年マテ墨国ノ首都
ニ在リテ学校教師及大使館ノ翻訳ヲナス
- 一、千九百二十年四月ヨリ再ヒ日本ニ来リ学校教師
ヲ希望シツツアリ

つまり山口高等商業学校教師となったものの一時帰国中に日独戦争が始まったため日本に入国できなくなったのではないかと推測される。それで1920年（大正9年）にやっと来日した。そして履歴書には大正10年4月より翌年3月まで同校の教師に月俸4百円で雇われたと付記されている。だが、それ以後の消息は殆ど不明だ。ただ、登張竹風の「ドイツ語懺悔」には次のような事が書かれている。

グラマツキー（鞍馬月）の鹿児島行きにはお雪さんも付いて行き、やがて二人の間に愛児も出来た。明治40年夏、グラマツキーは2カ月ばかり東京小石川自由御殿町にお雪さんと仮住ま

いし、久しぶりに同じ町内に住んでいた登張と互いに往来し、山口時代のことを談じ合った。それがお雪さんとの永久の別れであった。その時は子供は亡くなっていた。それから23年後、昭和5年(1930)、「グラマツキー先生、飄然伯林より来たって信州浅間温泉に遊ぶ」という新聞記事を見た登張はすぐに連絡を取り、二人は会った。グラマツキーは髪だけは白くなっていたが、相変わらず精悍の気は眉字の間に溢れていた。が、談一たびお雪さんの上に及ぶと落涙ばかりしていた。登張は彼のために就職口を探してやったが、条件が気に入らず断った。その後船で米国へ立ったが、小遣い銭が不足で上陸出来ず、日本へ逆戻り。お雪さんの弟の世話でシベリア経由で帰国した。数カ月後ベルリンから登張の許へ「君の申し出を断ったのは自分一代の失敗だった、旅費だけは何とかして工面するから又しかるべき勤め口をお世話願いたい」と書いて来たが、登張はそれが困難なる旨を返事した。その後消息は杳として分からない。

グラマツキーは誠に風の如く来たり風の如く去る人で、ロマン気質の人だった。ヴェンクシュテルン及びナホッドの日本書誌によると、彼には日本関係の論文・エッセイ・翻訳が約30編あるが、殆どが若い時のもので、1924年(大正13)に「東アジアの勝利」という論文をアレキサンデル・スパンが発行していた『Das Junge Japan』誌に発表したのが最後で、その後は見当らない。生活が荒れるに従い研究意欲を失ったようだ。元来フィロロギーを専門とする天才肌の学者であり、世が世ならばカール・フローレンツやグンデルトのようにすぐれた日本研究家として後世に名を残したのではないか。

五高不敬事件とエルドマンズデルフェル

1899年(明治32)2月11日、紀元節の式典を挙行中の熊本の第五高等学校で一つの事件が起った。同校でドイツ語とラテン語を教えていた傭外国人教師エルドマンズデルフェルが御真影に拝賀の札をせず、途中から退場してしまったのである。これを国粋派の生徒が目撃し、新聞社へかけこみ訴えた。そして事件が新聞紙上で報道されるや、五高开校以来の大きな騒ぎとなった。

旧制高校での不敬事件としては1891年(明治24)に、第一高等中学校で起きた内村鑑三の教育勅語に対する敬礼拒否が有名であるが、その余韻は保守色の強い熊本でまだくすぶっていたのである。

ところでこの事件は、外人事件または独乙人事件の呼称で主に熊本の近代史研究者や漱石研究家の間で知られているが、その場合関心は事件そのものに向けられ、当のドイツ人教師については記述したものが少ないようである。その点に不満を感じたので少し調べてみた。

熊本大学所蔵の五高関係史料の中に、1899年(明治31)12月29日付のエルドマンズデルフェル手蹟の履歴書(独文)一通がある。これによると、彼の来日までの経歴は次のごとくである。

エルンスト・エルドマンズデルフェル(Ernst Erdmannsdörfer)は、1870年(明治3)年1月27日、ニーダーラウジッツ(現在ポーランド領)のルツカウに生まれた。最初の教育をドレスデンの私立ベーメン学校で受けた。1881年に両親がベルリンに移住したので、それにと